

- 特集レポート①: コロナ禍における国内の論文投稿状況
- 特集レポート②: コロナ禍における学術集会の開催状況
- Journal Impact Factor 算出方法の変更について

S1M NEWS 特集レポート①

コロナ禍における国内の論文投稿状況

新型コロナウイルスは2019年12月に中国で感染者が報告されてから、世界中で次々にパンデミックと呼ばれる拡がりをみせました。2020年には各国の主要都市でロックダウンが実施され、その間研究者の方々も外出自粛を余儀なくされました。こうした影響からか、2020年のコロナ禍では世界中でジャーナルへの論文投稿数が上昇したことがいくつか報告されています。このような状況の中、国内でも同様に論文投稿数の上昇がみられたのか、S1Mに蓄積されているデータを抽出し調査してみました。

今回の調査対象は、2016年1月1日時点でS1Mを運用されていて、現在も引き続き運用されている132ジャーナル(和文誌74、英文誌58)を対象としました。これら132ジャーナルのS1Mに蓄積された投稿数データを以下4つの年別に分け、それぞれの月別・言語別・領域別の集計を行いました。

1. 2016-2018年に投稿された論文数の年間平均
2. 2019年に投稿された論文数
3. 2020年に投稿された論文数
4. 2021年(2021/1/1~9/30(9ヶ月))に投稿された論文数

① 月別投稿数

月別では2016年1月1日~2021年9月30日までの投稿数を月ごとに集計しました。

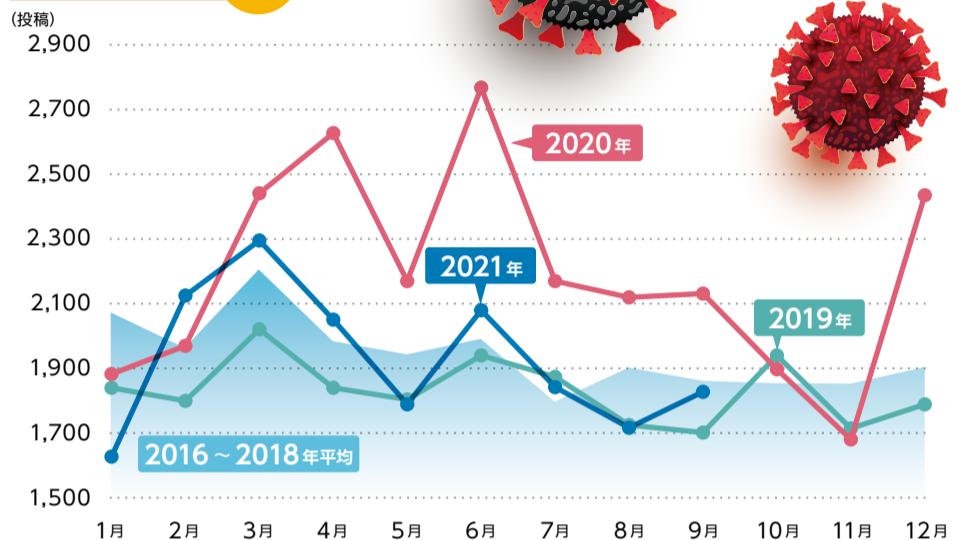
月別投稿数は年間を通して全体的に2020年の投稿数(26,187件)がもっとも多く、2016-2018年平均(23,322件)および2019年(21,982件)と比較すると10~20%ほどの増加がみられます。また、例年では3月と6月に投稿数が増える傾向にありますが、こちらも2020年(3月2,433件、6月2,755件)を2016-2018年平均(3月2,209件、6月

① 月別投稿数

月別では2016年1月1日~2021年9月30日までの投稿数を月ごとに集計しました。

月別投稿数は年間を通して全体的に2020年の投稿数(26,187件)がもっとも多く、2016-2018年平均(23,322件)および2019年(21,982件)と比較すると10~20%ほどの増加がみられます。また、例年では3月と6月に投稿数が増える傾向にありますが、こちらも2020年(3月2,433件、6月2,755件)を2016-2018年平均(3月2,209件、6月

① 月別投稿数



1,981件) および2019年(3月2,021件、6月1,938件)と比較すると10~40%ほどの増加がみられています。さらに、2021年の集計期間(2021年1月~9月、17,305件)をもとに、2016-2018年平均~2020年も同期間(1月1日~9月30

日)で集計したところ、2016-2018年平均=17,714件・2019年=16,526件・2020年=20,213件となっていて、2021年の投稿数が2016-2018年平均および2019年とほぼ同等となっています。

② 言語別投稿数

言語別は、英文誌と和文誌に分けて投稿状況に違いがないかを確認しました。

言語別投稿数では、まず英文誌において2020年(17,725件)を2016-2018年平均(14,908件)および2019年(14,343件)と比較したところ、それぞれの増加率は19%(2,817件増)と24%(3,382件増)となっていました。次に、和文誌(8,462件)では、2016-2018年平均=8,414件・2019年=7,639件・2020年=8,462件となっていて、2020年の増加率は2016-2018年平均と比較してほぼ横ばいの0%(48件増)、2019年との比較では11%(823件増)となっていました。また、月別投稿数と同様に9ヶ月間で2016-2018年平均~2021年を比較したところ、英文誌は2016-2018年平均=11,275件・2019年=10,731件・2020年=13,536件・2021年=11,400件、和文誌では2016-2018年平均=6,966件・2019年=6,287件・2020年

=7,300件・2021年=6,428件で、どちらの言語においても2021年の投稿数が2016-2018年平均および2019年とほぼ同等となっていました。

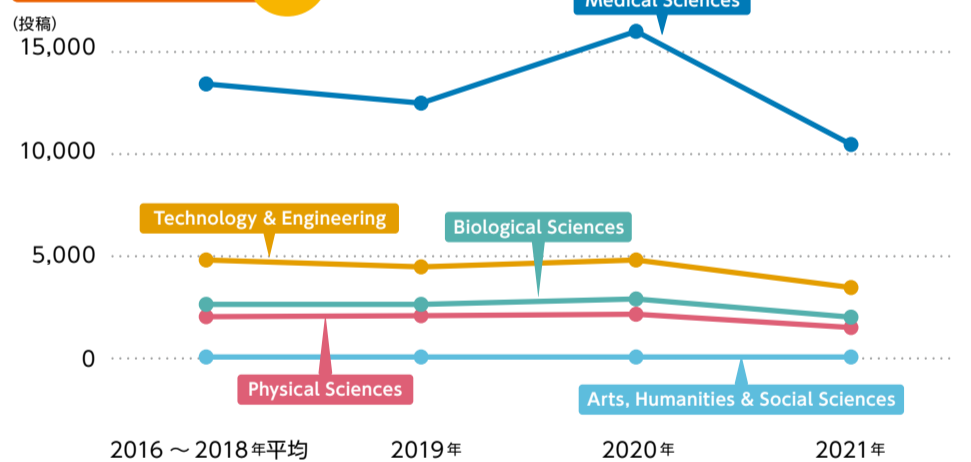
③ 領域別投稿数

領域別では以下5つの領域に分けて比較を行いました。

- Physical Sciences (理学)
- Technology & Engineering (工学)
- Biological Sciences (生物科学)
- Medical Sciences (医歯薬看護学)
- Arts, Humanities & Social Sciences (人文社会科学)

2020年を例年と比較して、もっとも投稿増加率が高かった領域はMedical Sciencesで、2016-2018年平均との比較では20%増、2019年との比較では29%増となっていました。反対にもっとも増加率の低かった領域はTechnology & Engineeringで、2020年は、2016-2018年平均との比較では-2%減、2019年との比較では4%増と例年との変化は見られ

③ 領域別投稿数



ませんでした。また、もっとも増加率の高かったMedical Sciencesの2021年と同領域の他年度の9ヶ月で比較したところ、2016-2018年平均=10,074件・2019年=9,256件・2020年=12,198件・2021年=10,368件となっていて、2021年の投稿数は、2016-2018年平均および2019年よりも若干増加が見られています。

今回の調査結果を振り返ると、月別では、2020年4月と6月に投稿数が大幅に増え、11月に大幅に減少しているのは、緊急事態宣言やGo To トラベルなどコロナ禍ならではの社会的影響が大きく及んだものと考えられます。また、2021年との比較では、現在はコロナ禍による影響も落ち着きを見せ、例年並みの投稿数推移に戻つつあるように見受けられます。

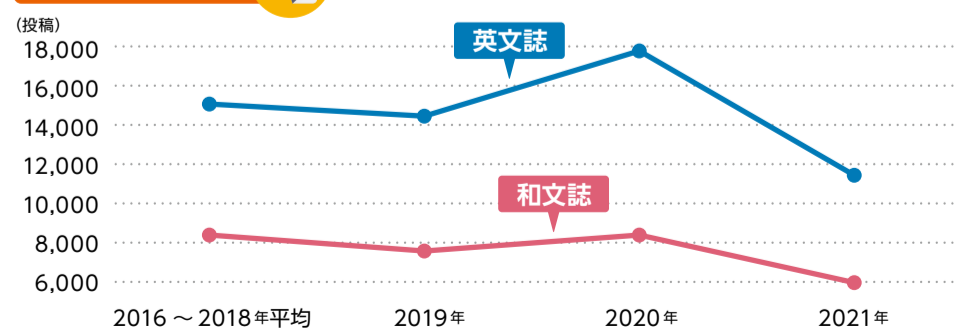
言語別では2020年のコロナ禍では特

に英文誌の投稿増加が顕著に見られましたが、2021年との比較では、英文誌・和文誌ともに現在ではほぼ例年通りの推移に戻つつあります。

領域別ではコロナ禍の中、世界の論文投稿状況と同様にやはり国内でも医学ジャーナルへの投稿増加がみられました。また、もっとも投稿増加率の高かったMedical Sciencesの2021年と他グループの比較においても現在は例年通りの投稿数推移に落ち着きつつあるのかと思われます。

今回は「コロナ禍における国内の論文投稿状況」に関連したデータを抽出してご紹介しましたが、弊社ScholarOneサポートセンターでは査読実績・審査期間や採否率など様々なレポートの作成サービスを行っています。貴誌の状況を分析する上で詳細な情報をご希望の際はご相談ください。

② 言語別投稿数





COVID-19感染拡大に伴い、学術集会の開催状況は大きく変化しました。

講演やディスカッションなど重要な役割を果たしてきた学術集会ですが、2020年のCOVID-19感染拡大に伴い、延期や中止、誌上発表による開催が相次ぐ中、2020年4月頃から講演データを収録してオンデマンド配信する“Web開催”がスタートしました。今でこそWeb開催は定着しましたが、思い起こすと、2018年の大型台風で発表者が会場に行くことができず、講演データをオンデマンド配信した学術集会が、Web開催の土台となっていたようにも思われます。

主流はハイブリット型

2020年8月頃からは、春開催を延期した学会が会場での発表とともに、リモートでも発表をする“ハイブリット開催”が始まりました。さらにLive配信も始まり、オンデマンド配信と合わせてWeb開催でも聴講とディスカッションができることが証明され、“Web開催”が徐々に浸透していきました。

「参加費のカード決済」「参加証明書や領収証のダウンロード」「デジタルポスター発表」なども、すっかり定着してきた感があります。

以降は緊急事態宣言が発令される度に、現地での発表が制限され、急遽開催形式の変更を余儀なくされるなど苦難の状況が続いた時期もあり、弊社でも作成しているプログラム・抄録集やホームページの変更対応に追われる日々が続きました。

最近になり、現地開催に比重を置く学会も増えてきてはいるようですが、オミクロン株の出現など、予断を許さない状況が続いており、しばらくは、“ハイブリット開催”が主流となるように感じられます。

Web開催のメリット・デメリット

Web開催は、参加方法の選択肢が増えることで、遠方への出張が不要になることや、時間を問わずに参加できること、同時帯の講演で会場が離れていても、オンデマンド配信でどちらも聴講できることはWeb開催の大きなメリットかと思われれます。

その反面、これまで行われてきた現地開催による最大のメリットは、ディスカッションや懇親といった“人”とのコミュニケーションによる出会いの場であり、他にもWeb開催では得られないものが多く存在しています。

今後の開催形式では、さらに現地開催とWeb開催の良い部分を共存させる学術集会にしていくことが望まれます。

弊社では参加登録決済代行業務やWeb開催支援システムの提供もさせていただいておりますが、Web開催になって参加者が増えたというお話も伺っております。

確かに、とりあえずどんなものか参加してみようとする傾向など、そのメリットを考えると参加者が増えたことには納得しますが、参加学会をより必要なものに絞って参加する傾向との二極化もあるのではないかと推測しています。

非会員、コメディカルの参加率の傾向など、各学会で参加者の属性や、2019年以前の参加者数を比較したデータがあるとさらに今後のハイブリット開催の参考になるかも知れません。

弊社もシステム提供や制作物などの経験を踏まえ、今後の動向に注視しながら最適なお手伝いができるよう思案を重ねていきたいと思っております。

医学系学会・専門医制度を熟知した
杏林舎のオリジナルeラーニング



昨今、学会主催の「教育セミナー」といった集客型セミナーは、その形が大きく変わりつつあります。専門医等資格に関する単位付与や会員の知識向上に、オンラインでのeラーニングシステムを活用することは、もはや一般的と言っても過言ではないかもしれません。

高まっていくご要望にお応えするために、学会様の事業を熟知した杏林舎のオリジナルeラーニングシステム「KaLibEL(カリベル)」を開発し、この度リリースをいたしました。

ご興味やご関心がございましたら、弊社ホームページの「お問合せフォーム」より、お気軽にお問い合わせ下さい。心よりお待ちしております。

<https://www.kyorin.co.jp/>



編集後記

新型コロナウイルスの影響により日常の多くの場面での環境が激変しましたが、今回はその中で弊社も業務で携わっている論文投稿数と学術集会開催について、皆様へ情報を共有できればと思いご紹介させていただきました。

投稿数は緊急事態宣言やGoToなど日常の行動制限に連動した影響が顕著に見られ、学術集会ではWeb開催が加速した反面で、あらためてリアルでのコミュニケーションの場としての重要性も注視されるようになってきているように思えます。日々更新される環境に柔軟に対応できる準備をしておきたいと思っております。

2021年は新たに18ジャーナルでS1Mを導入いただきました。日頃S1Mをご愛顧いただいている皆様にあらためて感謝申し上げます。本年もどうぞよろしく願いいたします。

S1M NEWS

2022年1月10日発行 第21号

発行 株式会社 杏林舎
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10
Tel.03-3910-4311 Fax.03-3949-0230
URL <https://www.kyorin.co.jp>
編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎
E-mail s1mnl@kyorin.co.jp

Journal Impact Factor 算出方法の変更について

これまでの算出方法では、被引用回数(分子)と掲載論文数(分母)において本公開された論文の数値が対象となっていました。今回(JIF2020)からは、早期公開された論文もカウントされるようになりました。「公開時期を優先」として、早期公開であっても本公開された年でカウントするのではなく、早期公開された年でカウントされます。



※より詳細な情報は、クラリベイト・アナリティクスにご確認ください。

これまで早期公開を導入している多くのジャーナルでは、論文のAccept後、公開準備が整い次第、早急に公開してきたかと思われます。また同時に正式な発刊時において掲載論文を戦略的に決定してきたジャーナルも多いかと思えます。しかし、今回のJIFの算出基準が発刊時期ベースから公開時期に対象が変更された事によって、今後、早期公開のタイミングについても戦略的に公開のスケジュール立てが必要になるかと思われます。